チュニジアにおけるイスラーム武装闘争派の動向

若桑 遼（上智大学大学院・博士後期課程）

はじめに

本稿では、チュニジアのイスラーム武装闘争派の動向を報告する。チュニジアは「対話」の精神に基づく政治プロセスが評価され、2015 年 10 月、4 団体がノーベル平和賞を授与された一方、2015 年には国の史上類を見ないほど甚大な犠牲者を出した凄惨なテロが起き、2015 年 3 月の国立博物館襲撃では邦人の命も奪われた。2013 年 1 月には、隣国アルジェリアのイナメナスのガス・プラント襲撃でも多数の邦人が犠牲になっている。イスラーム武装闘争派は、国境を越える広域の人的ネットワークを構築維持しながら、都市部及び山間部で遊撃的な戦闘行為を継続させている。

チュニジアのイスラーム武装闘争派は、2011 年の革命以後、モスクなどの拠点に加えて、大学構内や SNS を通じて宣伝を行い、動員に成功してきた。その動きにさらなる弾みをつけたのが、「イスラーム国（Islamic State）」の台頭である。IS をはじめとする国外のジハード主義組織に加入するために渡航を禁じられたチュニジア出身者の数は増加の一途をたどり、2015 年 9 月時点で実際に戦闘に参加するチュニジア人義勇兵の数は 5000 人にのぼると試算されている。国際社会がテロ防止・根絶を訴えるなか、これらの組織に加入する者が増加していることは、チュニジア一国の将来はもちろん、国際社会全体にとって深刻な懸念事項だと認識すべきであろう。

1.「イスラーム武装闘争派の人材供給源」としてのチュニジア

特定の地域にテロの脅威が存在するかどうかは、どの程度の「動員」があるかが指標となる。まず、チュニジア国内でテロ行為に関与した検挙者数をみてみよう。チュニジア内務省の統計資料によれば、2013 年の一年間に何らかの形でテロ行為に関与したとして検挙された者の総数は 1155 人であった。2014 年(1 月 1 日から 12 月 17 日まで)には、検挙者数は 3017 人と倍増し、う

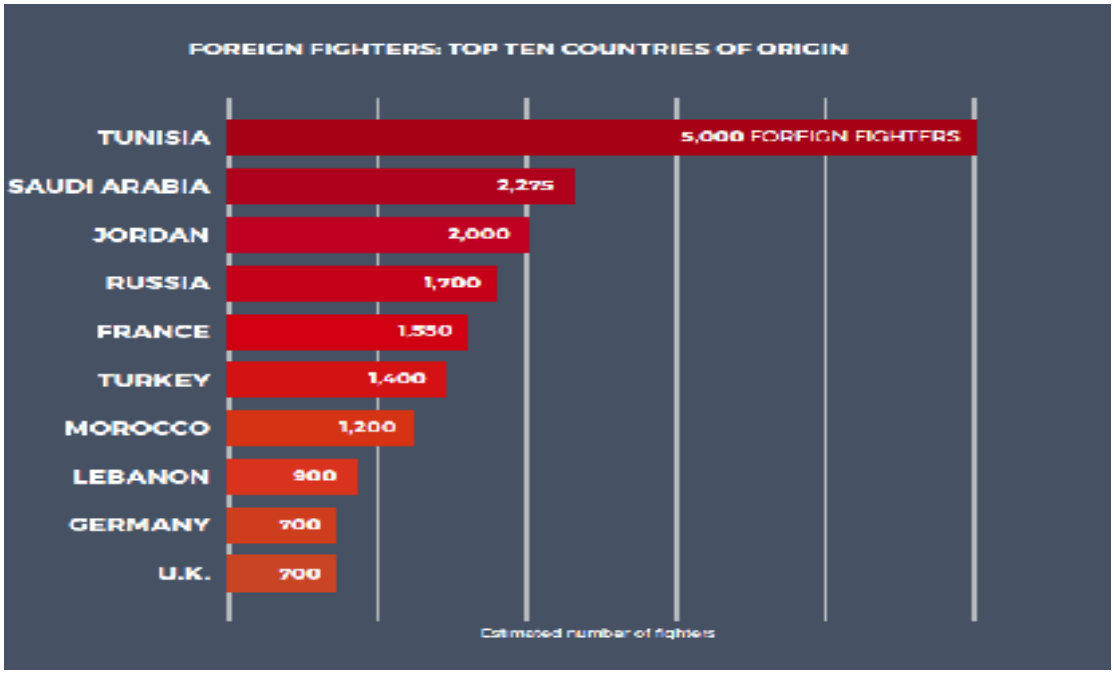
ち 19 パーセントにあたる 517 人は、シリア渡航支援ネットワークに加担していた人物であった。また同資料によれば、チュニジア国内で治安当局によって掃討されたテロリストは、2013 年には 16 人、2014 年は 21 人（うち 2 人はアルジェリア人）であった[1]。内務省は 2015 年の数字を公表していないが、国内の相次ぐテロ事件で検挙者数は増加していると推測される。

次にシリア又はイラクへの渡航を禁じられたチュニジア人「ジハード志願者」の数をみてみよう。チュニジア内務省は国外のテロ組織への加入を禁じるため、司法当局の許可を得て当事者の旅券を強制返納する措置を取っている。2014 年 2 月の時点で、この措置によってシリア又はイラクへの渡航を差し止められたチュニジア人の総数 8000 人未満であったが[2]、この数は 2015 年 7 月時点では 1 万 5000 人に達した[3]。

2014 年 11 月末の時点で、およそ 2500 人から 3000 人のチュニジア出身者がシリア及びイラクの IS に帰属したとみられる[4]。2015 年 9 月には、その数は推定 5000 人に達し、アラブ諸国内で最多数を記録した。さらに陸続きのリビアには 1000 人から 1500 人のチュニジア人戦闘員が潜伏しているとされる[5]。厳密な人数は把握されていないものの、マリには 60 人、イエメンに 50 人程度のチュニジア出身の義勇兵がいるとみられている[6]。またすでに戦地から帰国した者もおり、625 人が司法の訴追を受けている[7]。

注目すべきは、2015 年に IS による国内の相次ぐ大きなテロ攻撃が起こったにも関わらず、動員が衰えるどころか、それを契機としてさらに増加傾向がみられるところである。表 1 が示すように、シリア及びイラクの IS に帰属するチュニジア人戦闘員の数は、他国のそれに比べて突出して多い。さらに隣国リビアの IS に帰属する構成員も相当数存在する。また国内には「ジハード志願者」を抱えている。イスラーム武装闘争組織への動員の程度から判断すれば、チュニジアは依然として高いテロの脅威に晒されているといえる。

表 1　IS の外国人戦闘員の出身国（2015 年 9 月時点）



（出所）The Homeland Security Committee, *Final Report on the Task Force on Combating Terrorist and Foreign Fighter Travel* (Washington, D.C., United States. Congress. House. Committee on Homeland Security, 2015), p. 11<http://www.hsdl.org/?view&did=787528>, accessed February 29, 2016.

2.「チュニジアにおけるアンサール・シャリーア」

（1）組織の概要

革命後に結成された「チュニジアにおけるアンサール・シャリーア（Anṣār al-Sharī‘a bi-Tūnis）」は、チュニジアのイスラーム武装闘争派の動きを理解するうえで重要である。アンサール・シャリーアは、2011 年革命後のチュニジアに誕生したカーイダの系統を汲む「サラフィー・ジハード主義」の組織である。同組織は、活発な教宣活動を通じて社会と接触を図り、ほぼチュニジア全域に支部を拡大させることに成功した。アンサール・シャリーアの構成員は 4000 人程度であったが、モスクを拠点として各地で教宣活動（勉強会、講演会など）を行い、より広範囲の潜在的な支持者・共鳴者がいたと思われる。

創設者は 1965 年生まれのサイフッラー・イブン・フサイン（戦士名アブー・イーヤード・トゥーニスィー）である。彼は、ロンドン在住のサラフィー・

ジハード主義者アブー・カターダ・フィラスティーニーと親交があり、ロンドンからパキスタン、アフガニスタンに移り、カーイダの軍事キャンプに加わり闘争に従事した。

アンサール・シャリーアの構成員を含むサラフィー主義者たちは、2012 年 9 月 14 日、預言者ムハンマドを冒涜するアメリカ映画に抗議するために在チュニジア・アメリカ合衆国大使館及びアメリカ人学校を襲撃放火したとして多数が検挙された。この事件は、アメリカ大使を含む 4 人が殺害されたリビア・ベンガーズィーのアメリカ大使館襲撃（2012 年 9 月 12 日）と時期をほぼ同じくしている。

（２）活動領域及び他のジハード主義組織とのかかわり

チュニジアのアンサール・シャリーアは、カーイダとの関係が深い。アブー・イーヤードは、カーイダの主要な幹部とのコネクションを持っていた。2012 年のシリア内戦勃発後、アンサール・シャリーアは「ヌスラ戦線（Jubha al-Nuṣra）」との関係を保ち、比較的早い段階から戦闘員を戦地に供給してきた。他方、北アフリカやサハラ・サーヘル地域で実動する「イスラーム・マグリブの地におけるカーイダ（AQMI）」は、2013 年 5 月の声明で「シャリーア（イスラーム法）」による統治の実現に尽力するチュニジアのアンサール・シャリーアに対する支援を表明した[8]。革命後に結成されたチュニジア人構成員を主体とする「ウクバ・イブン・ナーフィウ部隊（Katība ‘Uqba ibn Nāfi‘）」は、AQMI のチュニジア支部である。同部隊は、アルジェリア国境付近のカセリーン県シャアーニビー山及び周辺の山岳地帯に潜伏し、地雷や伏撃により国軍に対して度重なる攻撃を行っている。ウクバ・イブン・ナーフィウ部隊の声明がアンサール・シャリーアの宣伝部門バヤーリク・メディアから発出されたように、両団体は密接な関係にあり、幹部・構成員間の行き来がみられ、武器・資金のやり取りが行われた。

ただし 2014 年以降、アンサール・シャリーアの構成員を含むチュニジア人ジハード主義者たちは、カーイダの指導部の方向性を批判して離反し、多くは「イラクとシャームのイスラーム国（Dawla al-Islām fī al-‘Irāq wa al-Shām）」に帰属を移した。現在、同組織の構成員の間では、シャリーアに忠実な統治

の実現を目指すISに支持が集まっている。他方、創設者のアブー・イーヤードは依然としてカーイダに忠誠を誓いつづけ、彼が率いる部隊はリビア国内に潜伏しているとみられる[9]。

アンサール・シャリーアは、2013年2月中旬、次いで7月下旬に起こった野党政治家の暗殺を首謀したとして、チュニジア政府によりテロ組織に指定された。政府は、徹底的な掃討作戦を遂行し、その結果、アンサール・シャリーアの主要な幹部は治安当局に殺害され、逮捕拘留されるか、又は国外に亡命した。

なおアメリカはベンガーズィーとダルナの同名の団体とともに、アンサール・シャリーアを国外テロ組織に指定し（2014年1月10日）、国連安全保障理事会のカーイダ制裁員会も同組織を制裁対象に加えている（2014年9月23日）。

3.「アンサール・シャリーア以後」のチュニジアのジハード主義組織・集団

2013年2月、次いで7月に起こった政治家の暗殺事件後、チュニジアの国内情勢は未曾有の混乱に陥った。チュニジア政府は、2013年8月28日、テロ実行犯を中核メンバーに含むアンサール･シャリーアをテロ組織に指定し、「反テロ闘争」を掲げて徹底的な弾圧を加えた。暗殺事件に関与した幹部は、当局との衝突で死亡するか、投獄された。また治安当局の手から逃れた者は近隣諸国に亡命し、その地でジハード主義組織に加わった者もいる。彼らのなかには、シリアやイラク、またリビアのISの支配地域に移り、戦闘で死亡した者も多い。

ただし、アンサール・シャリーアの構成員のなかで、チュニジア国内に留まり、地下運動に従事する者もいた。2014年半ばから2015年前半までのチュニジア人ジハード主義者の動きに関して「イフリーキヤ・メディア（Ifrīqiya lil-I‘lām）」という「ローカル」なジハード主義メディアの情報が参考になる。イフリーキヤ・メディアは、アンサール・シャリーアの元構成員が運営するSNSのアカウントで、AQMI傘下のウクバ・イブン・ナーフィウ部隊をはじめとするジハード主義者や組織・集団の発する声明や宣伝を発信してきた。2014年11月に運営者自身がISに忠誠を誓うことを発表した[10]。同メディア

は、IS に帰属を移したチュニジア人ジハード主義者のメッセージを度々掲載した。たとえば、2014 年 12 月、アンサール・シャリーアの教宣者カマール・ザッルークは、IS の支配地域から音声メッセージを寄せた。そのなかで彼は、チュニジア人青年に「移住（ヒジュラ）」を呼びかける一方、チュニジアの「世俗主義」政治家を非難し、IS によるチュニジアの「征服」が近いことを伝えた[11]。また、2015 年 5 月頃、イラクのサラーフッディーンで自爆攻撃により「殉教」した IS の戦闘員シャムス・アブー・アフマド・トゥーニスィーは、イフリーキヤ・メディアの通信員であった[12]。彼の「殉教」は、IS の公式声明でも発表されている（1436 年ラジャブ月 28 日／2015 年 5 月 17 日付）。イフリーキヤ・メディアは、広域のジハード主義組織や集団とのネットワークをもっており、そのなかにはナイジェリアのボコ・ハラーム、北アフリカ広域で活動するムラービトゥーンも含まれている[13]。

アンサール・シャリーアの元構成員たちは、IS に忠誠を誓った後、チュニジアの国家権力との「戦闘」に備えて国内のジハード主義細胞の組織化を試み、アルジェリア、トリポリ、バルカ、ファッザーンの IS の「州」と協働したと述べている。彼らが拠点としたのは、アルジェリア国境付近の山岳地帯であった。イフリーキヤ・メディアによれば、「〔2014 年、チュニジア国内の〕ジハード戦士たちの数は増加し、〔IS 本体により〕忠誠の誓いが受理され、敵が『軍事的閉鎖地帯』と呼ぶ場所のなかで軍事キャンプが創設された。〔中略〕我々は、我々以外の IS の構成員たちと連係をとるができ、可能な限り彼らを支援した[14]」とされる。ムハンマド・ムンスィフ・マルズーキー大統領（当時）は、2014 年 4 月 11 日付の共和国アレテで、標高 1500m を超えるシャアーニビー山とそれに隣接する山岳地帯（サンマーマ山、サルーム山、ムギーラ山）を軍事的閉鎖地帯と設定し、同地帯の進入をチュニジア及びアルジェリアの国軍に限定した。AQMI 傘下のウクバ・イブン・ナーフィウ部隊に対する軍事的作戦を遂行する措置であった。

図 1　「イフリーキヤ・メディア」の現在のアカウント

（出所）Ifrīqiya lil-I‘lām, twitter post<http://twitter.com/ifrikiya45>, accessed August 23, 2015. アカウント凍結を逃れるために、現在は一切ツイートされていない。2015 年 5 月中旬に IS 本体に「忠誠の誓い」が受理されて以降、右上に黒字で「イスラーム国（al-Dawla al-Islāmīya）」のロゴタイプが入った。

2013 年以降の当局によるアンサール・シャリーア掃討作戦の結果、チュニジア国内のジハード主義組織・集団は、治安当局の摘発を恐れて公然活動をせず、地下に潜行している。上記のイフリーキヤ・メディアは、バルドー国立博物館襲撃後、2015 年 3 月 30 日付のツイートで、4 つの「ローカル」なジハード主義組織・集団の存在を明かした[15]。それによれば、AQMI 傘下の「ウクバ・イブン・ナーフィウ部隊」に加えて、IS に忠誠を誓う「チュニジアにおけるハリーファ兵士集団（Jamā‘a Jund al-Khilāfa bi-Tūnis）」及び「ヒラーファ兵士の前衛（Ṭalā’i‘ Jund al-Khilāfa）」、いずれの組織にも帰属しない「イフリーキヤの地におけるタウヒード・ジハード集団（Jamā‘a al-Tawḥīd wa al-Jihād bi-Bilād Ifrīqiya）」が国内に存在し、これらの比較的小さな単位の細胞組織は、チュニジア全土で地下活動を行っているという。ただし「ウクバ・イブン・ナーフィウ部隊」と「チュニジアにおけるハリーファ兵士」以外は、活動の実態がほとんど明らかになっていない。

「チュニジアにおけるハリーファ兵士」は、2014 年 9 月頃、チュニジア人を主体とする AQMI 傘下のウクバ・イブン・ナーフィウ部隊の構成員のうち、AQMI から離反し、IS の指導者に忠誠を誓った集団を前身とする。この部隊は、2015 年 4 月にアルジェリア国境付近のマギーラ山及びサルーム山でチュニジア国軍に対する攻撃を行った。そして 4 月下旬の声明で「チュニジアに

おけるハリーファ兵士」という部隊を新たに結成したことを発表した[16]。同部隊は「イフリーキヤにおけるハリーファ兵士機構（Mu'assasa Ajnād al-Khilāfa bi-Ifrīqiya)」という名称のメディアをもち、2015 年前半にはテロ攻撃の声明や映像メッセージを発した。同年 5 月 18 日、IS 本体が公開した音声ファイル「カイラワーン・チュニジアのムジャーヒドゥーンからの声明：ムスリムたちのハリーファ、シャイフ・アブー・バクル・バグダーディーに対する忠誠の誓い」は、「チュニジアにおけるハリーファ兵士」が行ったものだと考えられる。

４.「イスラーム・マグリブ」を舞台とする IS の新たな戦略

2015 年 11 月 13 日に起こったパリ同時テロの実行者は、ヨーロッパ国籍を有するモロッコ系、アルジェリア系移民であり、マグリブ系移民社会へのジハード主義ネットワークの浸透を浮き彫りにした。2016 年 1 月中旬に IS はマグリブ諸国（主にチュニジア、リビア、アルジェリア、モロッコ）の IS の支持者・共鳴者に向けて、11 本のプロパガンダ映像を公開した[17]。IS 本体がマグリブ諸国を対象として同時期にこのような宣伝を一斉に公開することはおそらく初であろう。「イスラーム・マグリブ」の統一を掲げ、同地域を戦略的に重要視しはじめたことがうかがえる。

この映像は、IS の実効支配するバラカ、ジャズィーラ、アンバール、ハイル、ラッカ、ニーナワー、シナイ、フラート、ダマスカス、ヒムス、アルジェリアの「各州」の宣伝部門が作成したもので、主にマグリブ諸国出身の戦闘員計 34 人が出演している。出演者の出身国又は地域別の人数をみると、チュニジアとモロッコ出身者が各 10 人で最多である。この映像のなかで彼らは「同郷人」に対して IS の動員に応じるよう呼びかけ、行動を共にして各国の体制に対して攻撃を行うことを表明した。たとえば「ハイル州」のチュニジア人戦闘員は「パリの警備状況〔をかいくぐること〕は、チュニジアのそれよりも簡単だろうか〔いやそうではない〕」と問いかけ、パリと同程度の組織的な攻撃をチュニジアで行うことを「宣言」している。チュニジア、モロッコは、アラブ諸国のなかでも IS に帰属する戦闘員の数が多く、今後も地域の武装闘争派の動向を注視していく必要があるだろう。

表 2　2016 年 1 月中旬に公開された「イスラーム・マグリブ（al-Maghrib al-Islāmī）」の統一を呼びかける IS のプロパガンダ映像 11 本に出演した IS の戦闘員の出身地

国又は地域	数（人）	帰属する IS のウィラーヤ（州）の内訳（カッコ内は人数）、並びに備考
チュニジア	10	ジャズィーラ、アンバール（3 人）、ハイル（3 人）、ラッカ、フラート、ダマスカス
モロッコ	10	ジャズィーラ、ハラブ（アレッポ・3 人）、ハイル、ラッカ（2 人）、ニーナワー（2 人）、ヒムス（ホムス）
リビア	5	ハイル（2 人）、ラッカ（2 人）、ヒムス（ホムス）
アフリカ	1	バラカ
アンダルス *	1	ハイル
イラク	1	アンバール
エジプト	1	サイナー（シナイ）
不明	6	ハイル、ニーナワー、サイナー、アルジェリア（3 人）
総数	34	＊計 11 の「ウィラーヤ（州）」の宣伝部門がそれぞれ映像を作成した。

（注）「アンダルス」は、普通「中世のムスリム統治下のイベリア半島」を表すが、ここで「アンダルス」が具体的にどこを指すかは不明。
（出所）筆者作成。

図 2　IS の「ハイル州（Wilāya al-Khayr）」（シリア）の宣伝部門が作成したプロパガンダ映像に出演したチュニジア人戦闘員

（出所）Al-Dawla al-Islāmīya, ‘‘Saḥarū a‘yuna al-nāsi wa istarhabū-hum,’’ *Al-Maktaba al-I‘lāmī li-Wilāya al-Khayr*, Jumādā al-Thānī 1437 [January 2016].

5. リビアの IS との関係

IS は設立当初から有力な幹部を派遣するなど、リビアを欧州及びアフリカの交差する戦略上の要衝だとみている[18]。IS リビアの「委任指揮官」カフターニーによれば、IS はトリポリ、ミスラータ、トゥブルク、バイダー、サブラータ、アジュダービーヤで作戦を遂行している[19]。

IS に帰属しようとするチュニジア人にとって、陸続きのリビアはもっとも接近しやすい場所である。リビア当局は、同国内には 4000 人から 5000 人の外国人戦闘員が存在すると述べているが[20]、チュニジア人はリビアの IS の主要な構成員で、1000 人から 1500 人程度がリビアに潜伏すると推定されている[21]。2015 年にチュニジア国内で相次いで起こったテロの実行者は、「トリポリ州」のサブラータ（Ṣabrāta）で軍事訓練を施され、チュニジアの国家権力の影響力の及ばないリビアからチュニジア国内の攻撃を計画したことが明らかになっている[22]。また IS だけでなく、北アフリカの広域で活動する AQMI、ムラービトゥーン、チュニジアにおけるアンサール・シャリーアも統治能力の脆弱なリビアを後方基地としていることも付言する必要がある。

チュニジアのアンサール・シャリーアは、チュニジア当局によりテロ組織と指定され、国内で徹底的な掃討作戦を受けると、リビアに軍事部門の拠点を形成した。言及に値すると思われるのは、アフマド・ルワイスィー（戦士名アブー・ザカリヤー・トゥーニスィー）というアンサール・シャリーアの中核メンバーの担った役割である。ルワイスィーは、2013 年に起こったチュニジア人政治家暗殺の実行犯としてチュニジア治安当局に指名手配を受けたが、リビアで軍事訓練キャンプを指揮し、2015 年 3 月に親トリポリ政府の「リビアの夜明け（Fajr Lībiyā）」との戦闘で死亡した。彼は、多数のチュニジア人青年に軍事訓練を施し、チュニジア人の「移住者」に対して避難場所及び資金を提供し、武器の購入及び密輸を行った。

アンサール・シャリーアの元構成員で、治安当局の指名手配を受けたブー・バクル・ハキーム(戦士名アブー・ムカーティル・トゥーニスィー)は、IS の機関誌『ダービク』（8 号）で、「同僚」のルワイスィーの役割を次のように証言している。

我々〔チュニジアのアンサール・シャリーア〕がリビアに軍事訓練キャンプを形成したとき、ルワイスィーは〔リビアの〕軍事訓練キャンプの責任者のひとりであった。彼は、軍事部門に卓越していたため、同胞に訓練を施したのだ。また彼は、我々がチュニジアに武器を密輸しはじめたとき、我々〔の活動〕を支援した。〔中略〕〔2013 年 2 月、野党政治家の〕シュクリー・ビルアイードを暗殺した後、ルワイスィーは〔チュニジア当局から〕指名手配を受けた。このため彼はリビアに戻り、そこで同胞に訓練を施し、チュニジア国内での作戦を実行するために〔人員を〕派遣する活動を続けた。その後、彼がスィルトに移ったとき、〔リビアの〕IS に加わり、ハリーファに忠誠の誓いを行い、〔IS の〕軍事訓練キャンプの責任者になった[23]。

上の証言から判明するとおり、ルワイスィーはアンサール・シャリーアから IS に帰属を移したチュニジア人ジハード主義者の事例に含まれる。①アンサール・シャリーアはリビアに軍事訓練キャンプを設け、③武器を組織的にチュニジア国内に密輸・供給し、③リビアを拠点としてチュニジア国内のテロを企図したことがわかる。

IS に帰属を望むチュニジア人の多くは「トリポリ州」に入る。彼らは、ここで初歩的な軍事訓練を受け、空路トルコを経由してシリアに入るか、又はリビア国内に留まる。トリポリ政府内務省に帰属する「ラダア・ハーッサ（al-Rada‘ al-Khāṣṣa）」部隊は、フェイスブックの公式ページ上で、リビアの IS に帰属するチュニジア人検挙者の自供映像を公開している[24]。この自供は、リビアの IS に帰属するチュニジア人戦闘員の足跡を示している。チュニジア南部ジェルバ島出身の自供者は、チュニジア南部砂漠からリビアに密入国し、リビア西部のジャミーラ（al-Jamīla）、次いでサブラータに移動した。シリア渡航のための偽造パスポートが供給されると、彼はミスラータの空港からトルコに入ったが、トルコ当局により入国拒否を受け、ミスラータに返還された。スィルトの IS 幹部は、この人物に対してリビアに留まることを要請したため、彼はそれに従い、トリポリ近郊の IS 組織が実行した作戦を続けるとともに、チュニジアの観光地を標的としたテロを実行することを計画していた。

このように、ISの構成員はリビア西部の諸都市間を移動しながら、トルコからシリアに入る機会をうかがうと同時に、チュニジア及びリビアのテロ攻撃を実行しようとしているのである。

リビア当局によれば、ISの「トリポリ州」の指揮官はチュニジア人である[25]。首都トリポリ近郊で起こったいくつかのテロは、スィルトのISの指揮監督のもと、チュニジア人により実行された。たとえば2015年1月下旬、トリポリのコリンシア・ホテル襲撃の実行犯は、チュニジア出身者とスーダン出身者（各1人）であった[26]。また2015年9月18日、トリポリのミウティーガ空軍基地内の刑務所が襲撃されたが、このとき実行者のスーダン人2人、モロッコ人1人、チュニジア人1人が自爆攻撃で死んだ。ISは、2014年から2015年にかけてトリポリ市内のいくつかの在外公館の爆破襲撃事件を起こしている[27]。他方、リビア東部「バルカ州」のベンガーズィー（Banghāzī）でも相次いでISの戦闘員による自爆攻撃が行われたが、実行者はチュニジア、エジプト、リビア出身者が含まれていた[28]。

以上のように統治能力の脆弱なリビアは、国外のジハード主義者たちに利用されており、チュニジアをはじめとする周辺国の安全保障にも直接的な影響を与えているのである。

おわりに

ISは「国境」を超える人的ネットワークをもち「イデオロギー」と達成すべき政治目標を共有する。冒頭に記述したとおり、ISに帰属するチュニジア出身者は増え続けており、これはチュニジアの安全保障上のリスクが増大していることを意味する。リビアで軍事訓練を受け、シリアやイラクで戦闘に従事するチュニジア人義勇兵は、獲得した「ノウハウ」をチュニジア国内での武装闘争に利用しようとし、ISは大規模なテロ行為を遂行することで国際社会に自らの存在感を誇示宣伝しようとする。動員が継続する限り、チュニジアの「民主主義体制」の地盤は安定しているとはいえない。チュニジアが「アラブの春」の成功事例というためには、さらなるプロセスを積み重ねる必要がある。

武装闘争派が実際の攻撃の対象とするのは、国の軍隊や警察などの治安機

関、政治家、ジャーナリストであるが、外交官、外国人ビジネスマン、観光客などの「非ムスリム」も含まれる。IS 本体のスポークスマンは、2015 年 1 月下旬、全世界の IS の支持者・共鳴者に対して「近くの十字軍」を無差別に攻撃するよう声明を発した。2015 年に IS のチュニジア人戦闘員が関与したテロ（リビア・トリポリのコリンシア・ホテル襲撃、チュニジアの国立博物館襲撃、スースのビーチリゾート襲撃）は、主に西洋諸国出身の外国人一時滞在者を標的とした。アルジェリア・イナメナス事件、シリアでの人質事件でみられたとおり、イスラーム武装闘争派にとって在外邦人も攻撃の対象となりうる。またリビアのトリポリでは在外公館が相次いで IS に襲撃されたことから、場合によっては在外公館も標的となりうる。

2016 年 1 月に入り、IS 本体は新たな戦略として「イスラーム・マグリブ（al-Maghrib al-Islāmī）」統合のスローガンのもと、動員に応じるよう呼びかけ、三カ国の体制に対する攻撃を「予告」するようになった。パリのテロ事件の実行犯には、モロッコ系、アルジェリア系移民がいたことが確認される。チュニジアとモロッコは、アラブ諸国のなかでも戦闘員の人数が多く、ムスリムが大半を占めるマグリブ諸国にテロが波及するリスクが強まっている。今後もこれらの地域におけるイスラーム武装闘争派の動静を見守る必要がある。

―注―

[1]Ministère de l'Intérieur - Tunisie's *Facebook* page< http://www.facebook.com/ministere.interieur.tunisie/photos/a.967236813303695.1073741940.192600677433983/967236913303685/?type=1&theater >, accessed February 10, 2016.

[2] A. N., ''Lūṭfi ben Jiddū (Wazīr al-Dākhilīya) fī ḥiwār muṭawwal li-Shurūq: intaṣarnā 'alā al-irhāb wa qarīban al-ḥasm fī al-Sha'ānibī（ルトフィー・ベン・ジッドゥ内相がシュルークとの長い対話：我々はテロに勝利し、近くシャアーニビーは終了する）,'' *Shurūq* (Tunisia), February 23, 2014.

[3] France 24, ''Tunisie: 1000 arrestations depuis l'attentat du Bardo,'' *France 24*, July 10, 2015 <http://www.france24.com/fr/20150710-tunisie-1000-arrestations-terrorisme-essid-premier-ministre-antiterrorisme-attentat-bardo-sousse>, accessed February 10, 2016,.

[4] 'Uthmān Laḥyānī, ''Wazīr al-Dākhilīya al-Tūnisī Luṭfī ben Jiddū fī ḥiwār lil-Khabar: Athriyā' khalījīyūn yumawwilūn al-irhāb fī Tūnis（ルトフィー・ベン・ジッドゥ・チュニジア内相と『ハバル』の対話：湾岸の富裕層がチュニジアのテロに資金提供している）,'' *al-Khabar* (Algeria), November 29, 2014.

[5] The Homeland Security Committee, *Final Report on the Task Force on Combating Terrorist and Foreign Fighter Travel* (Washington, D.C., United States. Congress. House Committee on Homeland Security, 2015), p. 11<http://www.hsdl.org/?view&did=787528>, accessed February 29, 2016.

[6] Ibid.
[7] Ibid.
[8] Tanẓīm al-Qā'ida bi-Bilād al-Maghrib al-Islāmī, ''Risāla naṣḥ wa bayān li-Ḥaraka al-Nahḍa bi-Tūnis al-Qayrawān（チュニジア・カイラワーンのナフダ運動に対する忠告のメッセージと声明）,'' *Andalus al-Intāj al-I'lāmī*, May 2015.
[9] 'Uthmān Laḥyānī, ''Wazīr al-Dākhilīya al-Tūnisī Luṭfī ben Jiddū fī ḥiwār lil-Khabar: Athriyā' khalījīyūn yumawwilūn al-irhāb fī Tūnis（ルトフィー・ベン・ジッドゥ・チュニジア内相と『ハバル』の対話：湾岸の富裕層がチュニジアのテロに資金提供している）,'' *al-Khabar* (Algeria), November 29, 2014.
[10] A. N., ''Bayān wa I'lām li-Ahl al-Tawḥīd wa al-Islām（タウヒードとイスラームの民に対する声明と通達）,'' *Ifrīqiya lil-I'lām*, November 11, 2014<https://justpaste.it/BayaEfrikiaIS>, accessed 10 February, 2016.
[11] Cf. Kamāl Zarrūq, ''Waṣīya al-Shaykh Kamāl Zarrūq li-shabāb al-muslimīn 'āmmatan wa ilā shabāb Tūnis khāṣṣatan (jadīd) bi-Ta'rīkh 6/12/2014（2014〔年〕/12〔月〕6〔日〕、シャイフ・カマール・ザッルークによるムスリムたち全般、とくにチュニジアの青年に対する勧告）,'' *Ifrīqiya lil-I'lām*, [ca. December 2014]< http://soundcloud.com/ifrikya/06122014a>, accessed 10 February, 2016.
[12] A. N., ''Istishhāda Akhī-nā Shams Abū Aḥmad al-Ḥarbī al-Tūnisī kamā naḥsibu-hu taqabbala-hu Allāh（我々の同胞、シャムス・アブー・アフマド・ハルビー・トゥーニスィーの殉教）,'' [*Ifrīqiya lil-I'lām*], May 18, 2015<http://justpaste.it/l6qp>, accessed 10 February, 2016.
[13] A. N., ''Wa akhīran... Ta'līq 'alā al-bay'a allatī ṭāla intiẓār-hā（終に…長きに渡って待ち望まれた忠誠の誓いについての解説）,'' *Ifrīqiya lil-I'lām*, May 30, 2015<http://justpaste.it/finally>, accessed February 10, 2016.
[14] Ibid.
[15] Ifrikiya lil-I'lām, twitter post, March 30, 2015, http://twitter.com/riif0BB9.
[16] A. N. ''Ajnad al-Khilafa (Caliphate Soldiers) in Ifriqiya (Tunisia) released its first statement,'' *Mu'assasa Ajnād al-Khilāfa*, April 30, 2015<http://justpaste.it/ISTunisia>, accessed 10 February, 2016. 同部隊に関しては、しばしば異なる名称が用いられる。たとえば「カイラワーンのハリーファ兵士（Jund al-Khilāfa bil-Qayrawān）」や「チュニジアのハリーファ兵士たち（Junūd al-Khilāfa fi Tūnis）」などである。
[17] 映像のリンクについては、以下を参照。A. N., ''al-Iṣdārāt al-rasmīya min al-Dawla al-Islāmīya = #al-Maghrib _al-Islāmī（IS の公式映像=#イスラーム・マグリブ）,'' January 20, 2016<https://justpaste.it/IslamicMo>, accessed 29 February, 2016.
[18] Cf. Charlie Winter, *Libya: The Strategic Gateway for the Islamic State: Translation and Analysis of IS Recruitment Propaganda for Libya* (London: Quilliam Fondation, 2015) <http://www.quilliamfoundation.org/wp/wp-content/uploads/publications/free/libya-the-strategic-gateway-for-the-is.pdf>, accessed Feburuary 10, 2016; ''Interview with Abul-Mughīrah al-Qahtānī (the delegated leader for the Libyan Wilāyāt),'' *Dabiq*, issue 11, Dhū al-Qa'da 1436 [August-September 2015], pp. 60-63.
[19] Opt. cit., p. 60.
[20] A. N., ''Qā'id arkān al-jaysh al-lībī al-'aqīd Aḥmad al-Mismārī lil-Shurūq: Hunālika 4 alāf jihādī ajnabī fī Lībiyā wa na'sif li-maqqif al-Jazāir al-mu'āriḍ li-taslīḥi-nā（退役したリビア国軍総指揮官アフマド・ミスマーリーが『シュルーク』に：リビアには 4 千人の外国人ジハード主義者がおり、我々は武器提供に反対するアルジェリアの立場を遺憾に思う）,'' *Al-Shurūq* (Algeria), February 26, 2015; ''Wazīr khārijīya Lībīyā: nuwājih khaṭar ilā inzilāq ḥarb al-ahlīya mithl Sūriya（大臣：リビアは、シリアと同じく内戦による崩壊の危機に直面している）,'' *al-Sharq al-Awṣaṭ*, February 5, 2015<http://aawsat.com/node/node/298926>, accessed March 1, 2015.
[21] United Nations, Office of the High Commissioner for Human Rights, "Preliminary Findings by the United Nations Working Group on the Use of Mercenaries on its Official Visit to Tunisia—1 to 8 July, 2015" <http://www.ohchr.org/en/NewsEvents/Pages/DisplayNews.aspx?NewsID=16219&LangID=E>, accessed February 10, 2016.
[22] 2016 年 2 月 19 日早朝、アメリカ軍は IS に帰属するチュニジア人戦闘員の軍事訓練キャンプを標的として、サブラータの家屋を空爆した。空爆で、女性を含む少なくとも 41 人が死亡し、多数の負傷者が出た。死亡したのは、大半がチュニジア国籍を有する者であった。そのなかで、チュニジア国内で起きたテロ事件（バルドー国立博物館襲撃、

スースのビーチリゾート襲撃）を画策した、アンサール・シャリーアの元構成員ヌールッディーン・シューシャーンが殺害された。

[23] ‘‘Interview with Abū Muqātil,’’ *Dabiq*, issue 8, Jumādā al-Ikhīra 1436 [March-April 2015], pp. 59-62.

[24] Qūwa al-Rada‘ al-Khāṣsa’s *Facebook* page<http://www.facebook.com/QwtAlradaAlhaast/videos/vb.520514087968553/1116660825020540/?type=3&theater>, accessed Feburuary 10, 2016.

[25] ‘‘Wazīr khārijīya Lībīyā: nuwājih khaṭar ilā inzilāq ḥarb al-ahlīya mithl Sūriya（リビア内相：我々はシリアのような内戦による崩壊の危機に直面している）,’’ *al-Sharq al-Awṣaṭ*, February 5, 2015<http://aawsat.com/node/node/298926>, accessed March 1, 2015.

[26] Al-Dawla al-Islāmīya, ‘‘Ghazwa al-Tha’r lil-Shaykh Abī Anas al-Lībī –taqabbala-hu Allāh, fī Ṭarābuls（トリポリにおけるシャイフ・アブー・アナス・リービー（アッラーよ、彼を受け入れたまえ）の復讐の戦役）,’’ *al-Maktaba al-I‘lāmī li-Wilāya Ṭarābuls*, January 27, 2015<http://nasher.me/bauan>, accessed January 29, 2015; Al-Dawla al-Islāmīya, ‘‘Qawāfil al-Istishhādīyīn 1（殉教者たちのキャラバン１）,’’ *al-Maktaba al-I‘lāmī li-Wilāya Ṭarābuls*. Jumādā al-Ūlā 1436, [February-March 2015].

[27] たとえば在トリポリのエジプト大使館及びアラブ首長国連邦大使館（2014 年 11 月 13 日）、アルジェリア大使館（2015 年 1 月 17 日）、韓国大使館（2015 年 4 月 12 日）が IS による攻撃の標的となった。

[28] Al-Dawla al-Islāmīya, ‘‘Istishhādīyū al-Khilāfa fī malāḥim Banghāzī（ベンガーズィーの戦闘におけるヒラーファの殉教者たち）,’’ *al-Maktaba al-I‘lāmīya li-Wilāya Barqa*, November 16, 2014<http://manbar.me/isteshhade>, accessed November 17, 2014.